

あの頃、タカシの車で  
Back Then, In Takashi's Car

香取 声 (17G0806)

2020年11月、私は町田市における都県境を端から端まで歩くパフォーマンスを行った。

東京都の南部に位置する町田市は、その地理的要因からしばしば神奈川県であると誤解や揶揄をされる。ところが町田市はかつて実際に神奈川県の一部であり、東京と神奈川、二つの地域の間を揺れ動いてきた歴史を持つ。

町田市の県境付近に生まれ育った私は、日々無意識に県境線を繰り返し跨いでいる。当然線が引いてあるわけでもないため、県境線はあってないようなものであった。少年時代、カーナビのついたタカシの車に乗ってサッカーの試合に向かう時を除いて。

このパンデミックは、県を跨ぐ移動自粛要請が発表されたことなどにより、人々に改めて県境というものの存在を意識させたように思う。

しかし県境で一体何が変わるだろうか。

東京と神奈川、確かに違うはずだけど、その違いはどこに現れるのか？ 右と左で何か変わるのか？

これは二つのアイデンティティの間を揺らぐ故郷・町田市の複雑な県境線を可視化する試みとその記録である。

総県境距離：64.3km 総歩行距離：73.3km

---

4月の緊急事態宣言以降、県を跨ぐ移動の自粛要請、東京都へ/からの旅行に対する補助の除外、他県ナンバーの車に対する嫌がらせなど、県境が意識されるような出来事が多く起こった。線が引かれているわけでも、越境に書類が必要なわけでもなく、一般的にはこれまで特に気にされることのなかった県境。今回のコロナ禍という未曾有の事態により、日本に暮らす多くの人々が初めて県境を意識させられたのではないかと推測する。

しかしその意識させられた県境というものも、あくまで県と県をおおまかに分けるための極めて大雑把でぼんやりとした境界であり、はっきりとした線それ自体までは想像されないだろう。しかし、当然のことながら、そこには自然地形や村同士の土地争いの結果長い年月をかけて定められた県境“線”が存在する。その付近に暮らす人々にとっては、例えばどの学校に通うか、今回ならば県独自の給付金を受け取れるかなど、生活に関わる物事がたった数メートルの差で変わってくるということがあり得るわけである。

私が県境に目を向けたのは、東京都町田市の神奈川県との県境付近で生まれ育ったからである。町田市はしばしば「神奈川県町田市」などと揶揄されるが、実際に東京と神奈川の間を揺れ動きながら発展してきた歴史を持つ。遡れば19世紀末まで神奈川県の一部であり、水源問題や自由民権運動への対処から東京府（当時）に移管。その後も八王子と横浜を「絹の道」や横浜鉄道（現・JR横浜線）でつなぐことで東京と神奈川の物流を繋ぎつ、豊かな文化・思想を取り入れていったのである。

そのような経緯で形成された現在の町田市は、かなり歪な形をしている。それは県境線にも言えることであり、複数の飛地がある上に河川沿岸では今でも度々県境の変更が行われており、複雑なものになっている。

そこで私は東京と神奈川、二つのアイデンティティの間を揺らぐ故郷・町田市の複雑な県境線を可視化すべく、町田市における都県境を端から端まで歩くというパフォーマンスを行うことにした。

揺れ動く映像の中で黙々と歩き続けるこのパフォーマンスでは、直接的に何かが提起されることはないが、絶えずその地域性を表し続けるとともに、町田市の地下を通過するリニア中央新幹線の立坑工事とその反対運動など、複数のローカルな現代の社会問題も映し出す。

県境に可能な限り沿って歩く様子を、できるだけ少ないカット数で撮影・構成した本作の全長は、13時間近くに及ぶ。本学会では30分の時間制限があるため、全編の最初の30分をそのまま提示する形をとる。

県境の全行程を長回しで見せることに拘った本作は、“何も起こらない”時間を切り捨て、消費されることを前提に編集する資本主義的な考え方に異議を唱えるものである。

なお、映像に時折現れる音声による県境案内は、私自身の幼少期の記憶に由来する。